

三留理男 著  
目撃者  
3・25刊 A5判448頁 本体3800円  
毎日新聞社



# 絶望的な現場から 見えてくる人間の希望

流浪する民を撮り続ける報道写真家の生の軌跡

池田知隆

飢えた少年が、毅然と歩いている。過酷な栄養失調によって肉体は異形を呈しているが、背筋を伸ばしている。口は半開きで、左手をお腹にのせ、棒切れのようにやせ細った右手に粗末な食器を持っている。いのちをつなぐわずかな食糧を求めて配給所に向かうところだろう。悲惨を極める状況の中でも、その少年の横顔、その姿勢から、生きようという強い意志がひしひしと伝わってくる。

本書『目撃者』の表紙を飾るこの写真は、1980年代初め、アフリカのエチオピア難民キャンプでのコマダだ。「三留」氏の写真集を眺めていると、その悲惨さが希望を語っているかのようにうすうす、不思議な気分になってくる。作家の井上ひさしさんが、著者の写真集『国境を越えた子供たち』に寄せた言葉は、この少年の写真を目にした私の胸にもノトンと落ちてくる。絶望的な世界で少年が背筋を伸ばして生きる姿には

希望の光がさし、見る者の心を深く揺さぶる。高名な報道写真家である著者は、50年にわたって世界各地の紛争の最前線を歩いてきた。時代を象徴するさまざまな現場に立ち会った日々を追想し、毎日新聞日曜版に2010年4月から1年間連載したものをまとめたこのフォト回想録の中で、著者自身が「難民だ」と振り返っている。日中戦争が始まった翌年の1938年、朝鮮総督府農事試験場に勤める父のもとで生まれた。38度線にほど近い北朝鮮側の寒村だった。敗戦から日本の土を踏むまで2年5カ月かり、その途上、5歳下の弟を収容所で失った。過酷な引き揚げ体験がいつしか事実を凝視する魂を鍛え上げたともいえる。

中学3年のとき、父親に買ってもらったカメラを手にして写真に熱中。日大芸術学部写真学科に入学したものの、まもなく中退し、報道写真の世界に飛び込んだ。筑豊の女たち、60年安保、小児マヒ、ベトナム反戦闘争など激動する時代の荒波にさらされる現場でシャッターを切り続けた。60年代後半の学生運動から70年安保、沖縄返還にかけて雑誌のグラビアを飾った数々の写真を同時代的に見てきた書評者もあらためて、時代に抗いながら懸命に生きようとしている姿に新鮮な感動を覚えた。いまも失われてしまっ

た日本人の顔、豊かな表情に久々に出会えた気がしたからだ。その激動のピークをなした68年の「10・21国際反戦デー闘争」、いわゆる新宿騒乱事件が著者にとって「転機」となった。その夜、新宿駅の地下から外にでるととき、投石を顔に受け、流血して倒れたのだ。「私は、無人になっていた。駅長室に運び込まれて意識を取り戻し、知り合いの医院へ送ってもらった。テレビ中継が深夜まで続いたので、私は『また行く！』と興奮していたらしい。何針も縫ったが、悔しかった。このとき、私は反戦運動の側で徹底的にやる、という決意を固めた。この決意がなければ、後のカンボジアやアフリカの取材もなかったかもしれない」

新左翼の学生運動が下火になっても、三里塚での農民たちの成田空港反対運動にかかわり続けた。今も成田空港は使われない。「私は、写真を撮るだけでなく、自分の難民としての過去が彼ら農民の姿と重なり、当事者でもないのに『土地を売らないでくれ』とやってきたのだ。だから、どんな理由があっても成田からは飛行機に乗れないし、絶対に乗らない。乗ってしまえば、自分が壊れる」

やがて政治の季節は終わり、日本は経済成長への道を歩み続けるが、それを上まに著者はカンボジア、パレスチナ、アフリカ……と世界の紛争地域に足を向けた。いまなお、シリアにおける住民虐殺や中国・チベットにおける人権弾圧など、絶望的で悲惨な現実には絶えない。この間、「さまままに世界の表舞台からはいじめられ、流浪する人々の姿」を見続けた著者は、「それでも生きる。流浪する民こそ、本当の生、人間の本质、希望があると、今になって思う」

と訴える。多くの日本人は内向きになったといわれるが、本書は、私たちが心に刻んでおかなければならない日本と世界の歴史的瞬間を生々しく再現し、収録している。「失われた20年」といわれ、いまままたが流れている。しかし、いま、世界の最前線はフクシマにある。福島原発事故後、核をめぐる困難な戦いが繰り返されている。だが、日本人の多くはいつしかそのことを見ないふりをして思考停止状態にあるかのようだ。

放射能汚染は見えないし、匂わない。そんな放射能汚染の下で生きていかなければならない現代日本の難民の姿をどのように凝視し、表現していくのか。「福島原発事故後の」撮影を8カ月以上続けているが、今まで一枚も発表していない」と著者は本書で述懐しているが、目撃者としての今後の仕事に期待したい。

（ジャーナリスト）